【教育実践報告】

平成二十九年度「新入生セミナー」実践報告

櫻井陽子・近衞典子・平子達也

【キーワード】初年次教育／高大接続／キャリア教育／導入教育

はじめに

本学では、平成二十六年度に全学部全学科の一年生前期を対象にした「新入生セミナー」が導入され、本年度で四年目を迎えた。つまり、本年度は新入生セミナーを受講した一期生が卒業する年度でもある。これを一区切りとして、今までの成果をもとに、より充実させるべく、全学的に見直しを始めている。

国文学科における「新入生セミナー」は、一クラス五十名程度として三クラスを作り、学科教員が年度ごとに順番に担当するという形をとっている。全学的な方針を踏まえ、更に学科としての特性を加味すべく、試行錯誤しながら進めてきた。本報告は今までの実績をもとに、今年度行なった取り組みをまとめるものである。

一　初年次教育・導入教育から「新入生セミナー」へ

昨今、大学入学者の学力の多様化、意欲の低下等が問題となり、本学でもその対策に心を砕いている。そのうち、特に教育面において、駒澤大学教育改革検討委員会が平成二十二年度に発足し、様々な課題を討議してきた。課題の一項目に「履修環境の整備について」があげられ、その中に、「初年次教育・導入教育の再検討」が置かれている。そして、平成二十四年に「新入生セミナー」という名称のもと、全学共通科目の中に全員履修を義務づけた科目の設置が決定した。但し、必修ではなく、再履修はない。

本学でいう初年次教育とは、「すべての「駒大生」の共通の基礎を作ることを主眼とする。新入生が「高校までの学習」から「大学での学習」にスムーズに移行できるようにサポートすること」と定義されるものであり、導入教育の定義は「教育分野の学習準備として、学部学科毎に行なわれる教育」である。

初年次教育の目的は次の四点である。

①友達をつくること（ソーシャルスキル）
②大学に誇りを持てること（自校教育）
③大学を使いこなせること（オリエンテーション）
④将来の自分や社会に思いをめぐらし、大学で何をすべきか考える（キャリア初歩）

これを踏まえて左記の統一シラバスが作成され、担当者はそれに従って授業を組み立てることとなった。

シラバス：

〔授業概要〕

高度な専門に触れることになる大学においては、高等学校等におけるよりも更に「自立的」で「主体的」な学習態度が要求されます。問題意識をもって世界に向き合う中でテーマや課題を自ら探し出し、必要な資料や文献等の調査を行い、レポートや発表によって自分の考えを他者に的確に伝え、他者の意見に真摯に耳を傾けること――専門分野を問わず、これが「自立的」で「主体的」な学習の道筋です。本科目はこうした学習のための入り口であり、次の4点を共通の指針としています。

①駒澤大学において、誇りある大学生としての自覚を養う。
②学びの態度を「学習」から「学問」へと深化させる。
③他者との交流を通じて自己を磨く。
④たえず流動する社会のなかで自己を方向づけ、位置づける。

〔到達目標（ねらい）〕

「自立的」かつ「主体的」な学習態度を身につけ、今後の大学生活を実りあるものとするために、授業概要の4点は重要な柱となるはずです。すべての新入生がこれらの柱の意味を理解し、大学で学ぶことの意義について考えを深めることが本科目の目標です。

〔授業スケジュール〕以下は省略

二　国文学科の「新入生セミナー」

国文学科では、例年、四月始めに一年生全員を対象としたオリエンテーション（「スタートアップ国文学科」）を行なっている。新入生が新生活、新学期を円滑にスタートできるようにと始めた行事である。三年生が主体となって企画・運営する。まず、学生生活、年間行事、授業の取り方、などについて説明をし、次に、ゲームなどを行なって緊張感をほぐし、歓談の機会を作って新入生同士の距離感を縮める。半日の行事ではあるが、これによって、かなりリラックスした雰囲気が醸成されている。

社交的な学生はすぐに何人かの顔なじみができるが、そのような学生ばかりではない。大学自体にまだ馴染めず、緊張感を保ったままの学生や、なかなか自分からは声をかけられない、内気な学生が多い。そこで、新入生セミナーでは、まず、前節に掲げた「初年次教育の目的」①～③（シラバスの〔授業概要〕では①③）に重点を置いた授業を四月～六月に行なった。友達を作るには自身を紹介することが第一歩である。そのためには自己を表現することが必要となる。表現をするための工夫や努力をしたり、同じ作業を行なう中から同輩を知り、受け入れたりする。そのような時間を共有する中から、徐々に導入教育（シラバス②）に移行できるようにと心がけた。

専門的な内容を伴う授業は、同じ一年生が必修で履修する「基礎国文学」「基礎漢文学」「基礎国語学」「日本語文法入門」で受けるので、新入生セミナーでは、個々の専門性にこだわることのない、基礎的な思考力・表現力を身につけることのできる内容を考えた。

国文学科の新入生セミナーは、三クラスとも木曜日の三限に開講している。また、例年三クラスとも左記の共通の

時間を用意している（日程はクラスによって異なる）。

(1)図書館見学（オリエンテーション）

(2)禅文化歴史博物館見学（オリエンテーション・自校教育）

(3)狂言ワークショップ（導入教育）

(1)では、図書館に集合し、ガイダンスルーム等で図書館員による本学図書館の利用方法の説明を聞き、国文学に関する学外からの情報検索の方法などを学ぶ。引き続いて館内を見学し、図書館に親しむきっかけとする。

(2)について、本博物館は仏教・曹洞禅の教えを建学の理念とする本学の象徴的な施設である。今年度は、企画展「頂相―禅僧の肖像画―」を見学。また「博物館みどころマップ」を片手に、禅僧の生活を知り、鳴らしもの（木魚や銅鑼など）に触れるなど、館内の展示を楽しむ。

(3)は、導入教育の一環として、六月末から七月にかけて、狂言ワークショップを行なう。本学国文学科卒業生でもある狂言師、善竹大二郎先生を学外特別講師としてお招きし、深沢キャンパスの和室大広間を使用して、指導していただく。狂言の基礎知識についてのお話の後、狂言の鑑賞、体験へと進む。

また、今年度はこれ以外に、ソーシャルスキル獲得に重点を置いたグループワーク主体の授業を、四月に二回、外部業者（株式会社リアセック）に、試験的に依託した。

その他は各クラスの教員独自に行なう授業となるが、今年度は、授業内容をなるべく平準化するために、教員が担当クラスだけでなく、他のクラスを二時間ずつ受け持つという試みも加えた。以下に、授業の試みをいくつか紹介する。なお、授業は以下の順番どおり行なったわけではない。

三　ソーシャルスキルを磨く

その1（自己紹介の手紙を書く）

目的：自己開示を更に進める（表現する工夫）。

内容：自己紹介を〈書く〉。自分を知ってもらう対象を拡げる。

注意点：自己紹介メニューの一つに「連休での体験」を加える。

　会ったことの無い相手に、自己推薦文により自己紹介をする。

進行方法：

1）自己紹介文を書く。　A5に罫線（冒頭を左記のように記した用紙）

　拝啓

　新緑のまぶしい季節となりました。

　○○塾長におきましては、ますますご清祥のことと存じます。突然のお便りを差し上げる失礼をお許し下さい。私は△△さんのご紹介を受けまして、貴塾で講師をさせていただきたく、こうして手紙をしたためております。

2）グループ分けと席替え。5～6人×8グループ。机を囲む。

3）グループ内で一人一人の紹介文を読み、批評。長所（自分がまねしたい点）・改善点（自分が知りたい点）を付箋に書き、署名。それぞれの紹介文に貼る。

4）各批評を読む。
5）書き直す。
6）グループで読み合う。
7）自分が塾長だったら面接をしたいと思う手紙を推薦。
8）クラスで発表。

※5は時間が足りなくなりそうだったので実施せず。それでも7までで終了。紹介文を提出。次週、グループ毎に推薦された紹介文を全員にコピーして渡す。

定型的な書き出しにとまどう学生もいたが、全体的にはよく書けていた。自己の体験を具体的に織り込むことで具体性が出てくる。そうした書記能力はかなり備わっている。「連休での体験」を書くことを予告してあったために準備をしてきた学生もいたが、一方では体験がないという学生もいた（何もしないことも題材となるというヒントを与える）。

グループ内部で読み合うこと自体が刺激となった。会話だけではわからないクラスメイトの横顔に触れることができて、お互いの理解が深まったようだ。

その2（手紙の書き方や儀礼的表現を学ぶ）

目的：「自己紹介の手紙を書く」を受けて、手紙の書き方や日常的儀礼を具体的に学ぶ。
内容：手紙を実際に書く場合の注意点を知る。併せて、儀礼的常識を知る。

進行方法：

1）縦書きの手紙の書き方を確認（定型を知る）。
　横書きの形式、ビジネスフォーム等についても説明。

2）手紙の宛名に対する敬称を選ぶ。（○○から△△への手紙、として具体例を複数示す。）
　・①様　②先生　③殿　④御中　⑤気付

3）返信用の宛名、出欠の返信等の注意点を知る。
　・宛先の名前に付された「宛」「行」は「様」「御中」に直す。「ご出席」等の、自分への敬称「ご」は線で消す（「ご芳名」は「ご芳」まで）等。

4）時候の挨拶の文例を書いてみる。
　・『古今和歌集』の部立や和歌の配列、俳句の季語等にも触れ、日本の季節感を学ぶ。

5）時候の挨拶を書かない場合を知る。
　・お悔やみの手紙には、時候の挨拶は不要。関連して、祝儀・不祝儀の際の紙幣の折目、通夜に喪服を避ける地域があること等、「型」を通しての喜びや悲しみの表現があることを説明。

6）忌み言葉を知る。
　・忌み言葉を十語、配付プリントに記入、発表。「言霊」思想についても説明。

7）祝儀袋、不祝儀袋の特徴を知る（水引の結び方・袋の折り）。
　・婚礼・弔事→結び切り（重なることを避ける）／通常の慶事→蝶結び

8）まとめ

※基本的・常識的内容ばかりであるが、学生は意外に定型を知らない。また、「忌み言葉」という語自体を知らない学生も少なくなかったが、冠婚葬祭でのスピーチ等、対人関係の上でなくてはならない知識である。社会人となる第一歩として、日常生活における儀礼的常識や「型」を身に付けさせる機会とした。また、こういった儀礼を支えている古来の日本文化にも触れることで、専門教育への導入の意味合いも持たせた。

その3（コラムを書いてみよう）

目的：自分の言葉で表現をする。クラスメイトの書いたものから学ぶ。

内容：コラムをいくつか読み、書き方の特徴を学び、自分で書く。

進行方法：

1）朝日新聞朝刊連載の四人のコラムを一篇ずつ読む。

2）作業プリントにより、コラムの書き方と個性の違いによる多様性を摑む。

作業プリント内容

・文体の個性を味わい、四人の主張の仕方の特徴を考える。

①一番気に入ったコラムと、気に入った理由。

②一番わかりやすかったコラムと、どういう点がわかりやすかったのか。

③上手に書かれていると思うコラムと、どういう点が上手だと思うのか。

④4人の特徴、起承転結の運び方の分析。

3）決められた字数でまとまりのある文章を仕上げる。

注意点

・自分にとって関心ある材料、身近な材料を選ぶ。

・読者の想定（新聞購読者を想定）。

・主張を明確に。

・字数を守る。改行・誤字などにも気をつける。

・最後に自分の肩書を記入。内容にふさわしい肩書を考える。

・題名を考える。内容とマッチすること。読者が読みたいと思う題名を工夫すること。

4）グループ分けして、クラスメイトの書いたコラムをそれぞれ読み、批評。

5）グループで一篇、代表コラムを選び、選んだ理由をグループで作文。

6）コラムと推薦文を提出。

※1・2に時間をかけたために時間がなくなり、コラムを完成できなかった学生が多い。次の時間までに書いてくることになったが、コラムを書いてこなかったために欠席した学生がいた。時間配分が課題である。次の時間は4から再開した。次の週に各グループで提出した代表コラムをコピーして全員に渡した。

新聞コラムを読み、書き方を学ぶことで、自分の書きたいことが各自定まってきたように思われた。完成したコラムはそれぞれに内容の濃いものであった。クラスメイトのコラムを読み合うことで、意外な一面や経験を知るこ

ととなり、新鮮な喜びや刺激を得ていたようである。

その4（国文学科のホームページを作ってみよう）

目的と内容：

国文学科ホームページの一コンテンツとして「国文学科生の一週間」というページ作ることを想定し、当該コンテンツの案を考える。コンテンツ案を考えることを通して、自らの前期の大学生活を振り返り、今後の学生生活について考えるきっかけとする。

進行方法：

1）駒澤大学文学部国文学科のホームページを見たことがあるか否かという質問を契機に、大学ホームページの目的（誰に向けた、何のためのものか）について意見を求める。

2）新入生に対するアンケートの中で「先輩の一週間の時間割などがホームページに書いてあると役立つと思う」という意見があったことを紹介。実際に、学生の一週間の生活を紹介している他大学ホームページの例を示した（ここまで20分）。

3）本学国文学科を志望する「受験生」向けということを意識して、「国文学科生の一週間」というコンテンツを作るという前提のもと、その案を書く。A3の白紙の紙に自由に記述する（作業時間は30分程度）。

4）四人（もしくは五人）で一組のグループに分かれ、互いのコンテンツ案を紹介。それぞれの「良い点」を指摘しあう（10分）。

5）各グループの中で、最も「良い」と思うものを一つ決め、それを作った学生の隣の席に座っている学生が全体に向けて紹介する。

6）「良い」という評価のポイントとなった事柄を整理することで、コンテンツの「内容」のみならず、「形式」面も評価のポイントとなることに気づかせる。また、「内容」と「形式」が重要となることは、ホームページのみならず、文章一般に言えることでもあることを指摘。

※作業の際の注意点としては、必ず自らの現在の学生生活をもとにして内容を考えることとした。これにより、自らの学生生活を振り返ることができる。また、グループ内で出来上がったものを見せ合うことにより、他の学生がどのような生活を送っているかを知り、自らの生活を相対化させることを目指した。なお、優れた幾つかの案をもとにして、実際に学科ホームページに「国文学科生の一週間」というコンテンツを作成する予定である。

その5（新聞を再構成する）

目的と内容：昨今、ニュースはネットで読むという学生が増えており、新聞を読む機会は減少していると思われる。「一面を飾る」「三面記事」等の言葉を知らない学生も多い。新聞という媒体を実際に手に取り、ニュースの選定・配置、紙面構成等が各紙の主張の反映であることを理解し、各班でトップニュースを選ぶ過程を通じて自らの関心を相対化し、併せて相互のコミュニケーションを図ることを目的とする。

準備：新聞（各班2部ずつ）、模造紙、メモ用紙、はさみ、糊、マジック、定規。

進行方法：

1）班分け・説明。
2）新聞精読、紙面構成についての討議（30分）。
・トップニュースの選択（理由を明確にする）と、それ以外の記事の取捨選択・紙面構成を考える。
3）作業（20分）。
4）各班の発表（各班3分）（約30分）。
5）講評。

※作業自体は容易であるが、討議を通じて相互のコミュニケーションを図ることに重点を置いた。普段は見ない新聞が予想外に面白い、と読みふける学生もおり、そのことが逆に、ネットで自らの好む話題ばかりにアクセスし興味関心が狭くなりがちな現状を映している。完成した紙面は、例えば食品関係に絞った業界新聞のようなものもあれば、子供の興味を引く工夫を凝らしたものなど、内容も表現もバラエティに富み、個性豊かであった。

四　導入教育へ

その1（論文を読んでみよう）

目的：国文学に関する専門的な論文を読むことを通して、論文の体裁を知るとともに、論文を読む際にどのような点に注意すべきかを知る。

内容：辛島正雄「活字離れのすすめ―日本古典文学の愉しみ方―」（岡崎　敦・岡野　潔（編）『テクストの誘惑 フィ

ロロジーの射程（九州大学文学部人文学入門4）』二〇一二年）【以下、辛島論文】の結論部分（「おわりに」以外を読み、その「おわりに」に書いてあることを予測するという形で、論文の主張を捉える。なお、以下に示すように、論文読解の作業は、「ジグソー法」によった。

進行方法：

1）学生を四名もしくは五名ずつの十二グループに分ける。辛島論文は、「おわりに」を含めると、七つの節からなる。各グループには、「おわりに」以外の六節のいずれかの部分のみを印刷したものを配布する。つまり、例えば、一節を持っているグループは二グループあることになる。席は座席指定とした。

2）全体の流れを説明し、まず一人で論文を読む時間を5分程度とった。その後、グループ毎に、配布された節の内容について疑問点などを話し合い、内容をなるべく理解するように指示。

3）六人（もしくは七名）で一つのグループになるようにグループを編成しなおした。この際、同じグループになる六名は、それぞれが辛島論文の異なる節のコピーを持っているようにした。

4）（3）のグループ毎に、論文全体で何が主張されているのか、「おわりに」に何が書いてあるのかを意識しながら、話し合う。

5）各グループで話し合った結果を発表させ、あわせて、教員の側の論文全体に対する理解を提示した。

※二年生で演習に配属されてから、初めて論文を読むことになる学生がほとんどである。この回の目的としては、論文を読むということに対する心理的負担（不安）を軽減することがあった。実際、多くの学生から、演習や将来的な専門科目において読むことになるであろう「論文」というものが、どういうものなのかが分かり、不安が幾らか

軽減された、という声があった。

ただ、専門的な内容であるために、見なれない学術用語が多くあった。弥縫的な策として、分からない用語が出てきた場合には、電子辞書・スマートフォンなどで調べてもよい、という指示を出したが、特に、それほど意欲のない学生の場合、分からない用語があると調べることをせずに、そこで理解することを放棄してしまうようであった。それでも、特に右の（2）「グループで話し合う」という段階で、周りに支えられながら理解しようとする姿勢が見えた。これは、つづく（3・4）の段階において、編成しなおされたグループの中には、当該論文の当該の節についての情報を持っているのは、自分一人しかいない、つまり、自分が理解をしていなければ、グループ全体の理解を妨げることになるという、ある種の責任感・義務感があったことも一つの要因かもしれない。

教員として強調したのは、今後、演習などで論文を読む際にも、自分一人で完全に理解しようとして、理解できないのであれば、友人（や教員）の力を借りることが必要である、ということであった。実際に学生からも、「一人では無理だけど、周りに助けられたら出来た」というコメントがあった。学習（研究）は必ずしも一人でやるものではないことを実感させることも、学生を「落ちこぼれない」ようにするための一つの手段ではなかろうか。

その2（自分で課題を発見しよう）

目的：何がわからないのか、知りたいことは何かを見つけて掘り下げる。

内容：作業プリントにより、問題意識を芽生えさせる練習をする。

進行方法：

前の時間に、第二節で記した専門基礎科目の中から、自分が興味を持つ科目のノートを一種類持参するようにと予告。

本時では、作業プリントにより進行。

作業プリント内容

選択した講義科目名。

・理解しきれなかったり疑問に感じたことの中で、自分なりに理解を深めたくなったこと。

・先生の授業を聞いて面白くて、もっと知りたいと思ったこと。

調べたいこと、考えたいことを箇条書きで書き出す（5点）。

右の調べたいこと、考えたいこと5点の中から、自分で調べる・考えることを一つ選ぶ。

選んだ理由。

課題。

どのように調べたらよいのか、案を出してみる。

※「案を出してみる」の具体的な指導は「その3（レポート（論文）の書き方）」で展開。

時間をかける余裕がなく、学生自身に消化させるための時間が少なかった。

その3（レポート（論文）の書き方）

目的：レポートあるいは論文の書き方について知る。

内容：パワーポイントを用いた講義形式を基本とした。途中、右の「その2（自分で課題を発見しよう）」を受けて、自分で見いだした課題について、レポートを書くことを想定し、どのように調べ、書くべきかということについて、考えさせた。

進行方法：

用いたパワーポイントの目次と、各節における概要を以下に示す。なお、本時に述べた内容は、戸田山和久『新版論文の教室―レポートから卒論まで―』（ＮＨＫブックス　二〇一二年）に依拠している。

1．論文とは何か

論文には、①問い、②主張、③根拠が必要であることを示した。また、レポートには、論文（論証）タイプのものと、報告タイプのものとがあることを示した。

2．報告タイプのレポート

「その2（自分で課題を発見しよう）」を受け、そこで見いだした自らの課題について、報告タイプのレポートを書くという想定のもと、レポートの「アウトラインを書く」という作業を行なわせた。

3．論証タイプのレポート

続いて、論証タイプのレポートについて、論文の「型」と「問いを立てる」ということを中心に述べた。特に、論文は内容とともに、形式（型）が重要であることを強調した。

4．まとめ

まとめとして、実際にレポートを書いてみて、教員に見てもらうことを勧めた。

※本節「その1（論文を読んでみよう）」の場合に述べたように、学生にとって、論文を読むことや、レポートを執筆することは心理的な負担が大きい。かといって、授業内においてレポートの書き方等を細かく指導する時間は、現状では確保できていない。卒業論文執筆時はもちろん、二年次からの演習や専門科目においても、レポート・論文を書くことは必要となる。早い段階から、レポート・論文の書き方について意識をさせることは重要である。実際、学生からのコメントの中にも、今後レポートや論文を書く際に、参考となり得る情報が得られ、有意義であったという意見があった。しかし、特に意欲に欠ける学生は、自らの課題を見つけることができておらず、そのために、本時において具体的な作業をすることができないということがあった。

五　キャリア初歩

その1（キャリアセンターの話を聞く）

キャリアセンターの担当者に依頼し、一年次より知っておくべきキャリアに関する基本的な事柄について六十分程度の話をしていただいた。昨年度の国文学科における進路情報などに関する具体的な数字や、卒業生や内定者に対するアンケートなどにもとづく就職活動の実態について具体的な話を聞くことができた。就職活動はまだ先の話で、実感があまりない、という意見もあったが、熱心に耳を傾け、授業後にキャリアセンターの担当者に質問をする学生の姿も見えた。

その2（先輩〈四年生〉の話を聞く）

前の時間に、四年生に聞きたい事項をアンケートしておく（参考として、「学習・研究・大学生活・サークル活動・アルバイト・人間関係・将来のことなどについて」といった事例を示す）。登壇を依頼していた四年生二名が事前にアンケートを集計、整理し、一年生からの質問に答える形式で話す。

身近な先輩の実体験の話であり、四カ月を過ごしてきて、大学生としての実感と自覚が沸いてきた段階での話となった。一年生は素直に、切実な問題として耳を傾けていた。

六　おわりに

以上、本年度の新入生セミナーにおける実践を振り返ってきた。高校から大学への円滑なる移行の為に試行錯誤を重ねている。未だ道半ばであるが、今後も工夫を凝らして、授業を構成していきたい。

（さくらい・ようこ／本学教授）
（このえ・のりこ／本学教授）
（ひらこ・たつや／本学講師）